

た。中山寮寮長代理の伊勢氏は、蜂起計画があることや、変な空気は「全然感じなかった」という。

暗い夜

星も月も出てない、蒸し暑い夜だった。中山寮では約八百人の中国人が、計画を胸に目だけギョロギョロさせて時間を待ったという。午後十時半ごろ、悲鳴が聞えた。

李さん 七十人ばかりで、東亜寮に行こうとしていた時、ギャアという大きな悲鳴聞いた。行ってみたら、任鳳岐(注)が殺されているの。みんなまだ部署につかないうちに、計画より早まって殺したわけ。みんなあわてて、スコップとかツルハン持って宿直室に飛び込んだよ。殺したのは任のほか四人。逃げた三、四人が会社とか警察に連絡するだろうし、交番近いから、それからが大変だった。

伊勢さん 十一時すぎか、声で目が覚めて窓から飛び出した。一番奥に寝ていた。走って鹿島組の事務所まで行って、迎えにこいと電話した。途中、だれにも会わなかった。声というのは悲鳴だったかもしれない。隣に人が立っていたような気がする。すぐ隣が殺されたべよ。猪股だから

小畑だか……。

李さん 下の方で警報器がウーと鳴ったり、半鐘鳴ったの聞こえた。みんなばらばらになって走り出した。中山寮からかなり離れたところに高い山あった。真っ暗な中、それに向かって、道知っている人と大隊長先頭になって逃げたよ。二時間ぐらい走ったか、その山、後で獅子ヶ森とわかった。

劉さん 私の受けた命令は、立ち上がれる人は全部連れて、薬だけはいっぱい持つようにということだった。立ち上がれない人はこれやむを得ない。どうせ助からないから。ところが、そうになるとみんな悲しい声で「私歩ける」とすがってくるの。それでもたまたして朝になった。寮に火つけるわけにもいかなかったよ。

李さんたち本隊二、三百人はともかく獅子ヶ森に逃げた。劉さんたち看護班が一番遅くなってやっと寮の裏山にのぼり切ただけだった。あとのほとんどはわずかな食糧を盗んだり、ツルハシを持つなどして思い思いの方向にばらばらに逃げた。腹ペコで、途中で畑を見つけると大根でも何でも生のままバリバリ食べたという。

△注▽中国人の軍需長だったが、補導員らと内通、食料の横流しを黙認していたため、中国人の

怒りを買っていた。

白い道

当時、花岡町の警防団員だったSさん(六四)は、蜂起の夜、二十人ほどで夜の巡回をしていた。外国人の寮が二十以上ある町なので、毎晩の巡回は重要な仕事だった、という。Sさんの話。

巡回を終わって、町のはずれで一服しようとして道路わきに腰をおろした。暑い時で道路が真っ白に見えた。すると、向こうから裸の男が走ってくる。パンツ一枚でハダシ。つかまえて「どうした」と聞いたが、体がぶるぶるふるえていてしゃべれない。ビンタをくらわせたが、あごがはずれたようにガタガタしている。手まねで鹿島組の方に行ってくれという。男に警察に逃げろと言って、われわれは組にいつて見ようということになった。

事務所に行くと、テーブルに一人がいて、組の二、三人が血止めをしていた。中山寮で暴動だと聞いた。中国人同士で大きなけんかでもあったかと思った。おっかないもの見たさもあって寮の方に行くと、途中の道で一人が死んでいた。ツルハシで殴られたらしく、背中に丸い穴があった。

中山寮は静まりかえっていた。中は電気が消えて暗いし、何かあるかわからない。怖かったが、思い切って中に入って電気をつけた。すぐ目の前に死体があって、ぶくぶく血が吹き出していた。サイレンはその後鳴った。寮の中には、中国人がいっぱいいて、みんなちゃあんとしていた。土間に二十人ぐらい。見ているうちに夜が明けてきて、十人、二十人とまとまって出てきた。別に抵抗するものもなく、こちらも構えてはいたけど、なにもしなかった。そうこうしているうちに、鹿島の人がたくさん来て、警察も来た。

事件当日、大館警察署長だった三浦太一郎氏(七二)は、午後十時半ごろ、花岡巡査部長派出所の後藤健三巡査部長から電話で「中国人が日本人を殺して逃げた」と第一報を受けた。受話機からワァーッという叫び声が聞こえていた、という。バラバラになって逃げる中国人がかん声をあげるには考えにくいだが、中山寮近くの鹿島組事務所は、約八百人の中国人の声などで包まれているのかもしれない。

獅子ヶ森

李さんたち主力部隊が逃げた道をたどって歩く。中山寮があった鉱さいダムから山道を下り、

二手に分かれた右手をたどる。約十分。平地に出た。小坂鉄道の線路を越え、今はもう地盤沈下で集団移転し、廃屋が並ぶ松峰地区を横切る。老女(七〇)に聞いた。

夜明け、まだ暗いうち、ザザッザザッという音を聞いて外に出たら、ぞろぞろ何十人も支那人が歩いていった。みんなやせこけて、食い物かついでおし黙ってな。

松峰から橋を渡り、舗装した釈迦内の街並みを抜ける。国道7号を横切りゆるやかな坂道を上りきると、すぐ正面に獅子ヶ森が見えた。しばらく行って斜め左に入る。

林の中の平坦な道を約十分、かなり深そうな山だ。急な上り道に出て五分も登ると、ガレキだらけの小さな広場があった。左手の林に、松葉が積もったならかな道。木もれ陽の中、木々の間を上下して約十分、突然視界が開けて、六〇度近い傾斜の岩場に出る。岩の上を三十メートルも登ると、そこが頂上だ。

標高二二五メートル。ふもとの標高が八〇メートルだから、そんなに高い山ではない。だが、頂上からの景色はすばらしい。花岡鉱山から、大館の市街地、四方の山々、集落が手に取るように見える。それは同時に、この山にたてこもった李さんたちにとって逃げ道がなかったということだ。疲れ切った体にムチうち、六キロの道を逃げ、行きついたところがこの頂上だった。

李さん 明るくなって、あたりが見えて来ると、山の周りに家があるのを見た。警察とか、消防団がどんどん集っているの。一晩寝ないで走ったし、食べてないからふらふらさ。武器だって何もない。ツルハンとかスコップ、木の枝折った人もいたけど、日本人みんな鉄砲とか日本刀持ってるよ。戦っても負けるのすぐわかったさ。

石を投げ、森に隠れて激しく抵抗したともいう。鉄砲と日本刀の前に、どれほどの力となったか。李さんは、約二時間でつかまり、柔道で投げられ、こん棒で殴られてトラックに乗せられた。軍刀で切られて死んだ仲間もいたそうさ。

広場

昭和二十年七月一日、夜が明けると一斉に「中国人狩り」が始まった。まず、劉さんたち看護班がつかまり、昼までには李さんたち主力部隊約三百人も全員つかまった。トラックで花岡町桜町、共楽館(注)の横の広場に集められた。劉さんたちは二人ずつ後ろ手にしばられ、砂利の上に正座させられた。数百人の町の人がこの様子を目撃していた。

朝早く、広場に中国人を並べて、てんでに棒で殴ってました。十時ごろ、憲兵隊が来てからは、殴らせなかったけど。戦争とはいえ、かわいそうでした。——共楽館前に住むK子さん(五七)

なんとぬくい日で、飲まず食わず三日だろ。ひどいもんだ。足を崩すと、カシの棒で殴られる。小麦粉かなにかがついたものか、顔が真っ白な人もいたな。——作業員木村喜代美さん(四三)

共楽館の非常口から、ひょいとのぞいた。四、五人が天井からなわで逆ざぶりにされ、二人ずつついて棒でたたいていたすべ。おっかなかった。——作業員I子さん(五一)

大した、見もの「だった、という。「森進一がきたってあんなに人は集まらない」というほどだ。病人や、一部遠くまで逃げた人を除いても、七百人以上の中国人が、三日の夕方まで、三昼夜近く広場に置かれた。死んだ人も多かった。血アブが飛びかっていたともいう。

耿大隊長や李さんたち十三人は共楽館で調べを受けた。

李さん 劇場(共楽館)の調べ、ひどかったよ。木の腰掛けにしばらくつけられて、水くんできて、

鼻と口から水入れる。気失うと、逆さにして、水を出すの。その苦しいこと大変よ。天井から針金でつるされた人もいる。宙ぶりの体、棒で殴るから、針金でしばった親指の皮べろっとむけて落ちたよ。

三日目の夕方、大豆カスのおかゆが出て、十三人以外は中山寮に戻された。劉さんたちは、殺されたり、病気で死んだ人の埋葬をした。暑さで、死体の顔はナス色に変わり、名前の確認はむずかしかったという。

〔注〕藤田組(現在の同和鉱業)の厚生施設。前年夏完成した。時々映画や催し物が開かれていた。

日本刀

獅子ヶ森を取り巻く大館市芦田子、賽ノ神、下代野、商人留など各地区の消防団、警防団に出動命令が出たのは七月一日未明から午前五時にかけてだった。軍隊に取られない十代の男と、軍隊帰りの五十歳以上の男が手に手にこん棒や日本刀を持って山を取り巻いた。賽ノ神、農業Aさん(四七)の話。

ここらは侍の落人の村だから、刀、ヤリ、弓、あらゆる武器持って出たな。おらも刀二本持った。銃を持ったものも二、三人いた。怖くはなかった。世界の一等国だという自負があったべ。勢ぞろいしたのが午前三時半ごろ。支那人は上から石投げたり、抵抗があって、近づけなかった。それでも銃撃されたりしてあきらめて下りてきた。六時ごろかな。

大分年をとった人で、おっかな半分にヤリを突き出したら、支那人がしがみついで、引っ張ろうとして逆に突いてしまった。腹から腸が出て、それ手当てもしねえで田のわきさほうって置いて、死んじまった。抵抗したら殺してもいいということわかっている、殺そうとしたわけがねえ。結局二人死んだな。

支那人でも気の弱いのは木にぶら下ったりして自殺した。二人。支那語のできる人が話してすなおに答えた人は、そんなにいじめられねえけど、黙ってたり、抵抗するとたいぶ殴られた。

Aさんは、中国人を殺してしまったのは「正当防衛」だという。日本人を先に殺して逃げたし、シャベルやツルハンシで抵抗したからというのだ。他地区で「富士の巻き狩りのように両手両足をしばってつるした」「役場の前でさらしものにした」(注)のも、同じような考えかもしれない。

一方で、捕まった中国人に食事をさせた話も少なくない。商人留ではにぎり飯を三、四個やったおぼさんがいた。賽ノ神でも比較のおとなしく捕まった親子には「マンマくわせた」という。豆をいって食べさせた人もいた。タバコやった人もいる。「敵」とはいえ、圧倒的多数で捕まえてみたら、同じ人間だった、ということなのだろうか。

△注▽ 押切順三作「無人の村」(山岩波新書「詩の中にめざめる日本」)から。

非常召集

蜂起事件の処理にあたった元大館署長、三浦太一郎さん(七二)から話を聞いた。電話では忙しいうちからと断られたが、日曜の午後、秋田市の自宅を予告なしに訪ねると、庭いじりをしていて快く話してくれた。

二十年五月、署長として赴任してね、中山寮には二回視察にきましたよ。駐在から、放牧中のウシ、ウマを密殺して食べていると聞いて、華労(中国人労働者)の健康回復のためには仕方ないと黙認しました。それにしても、食料問題が深刻で、病人のための薬品など、組(鹿島組)がどの程度考えているか不安でしたな。寮の労務係は大丈夫だといっていましたけど……。

蜂起の夜は、お客さんを日景温泉に送って帰ってきた。十時半ころ、寝入りバナを駐在の後藤君の電話で起こされた。中山寮の華労が暴動を起こし、日本人を殺して逃げたというので、近寄らずに遠巻きにして、放火、強盗、婦女暴行に注意せよと指示しました。

服をつけて、署員を非常召集、県の特高課長に電話すると、軍隊を呼ぶかというので、いや、武器も持っていないし、やめてくれと断りました。その代わり、本部から百五十人ぐらい応援の警察官を出してほしいと頼むと、わかったということでした。

集まった署員十四、五人のうち、十二時すぎ発令になった空襲警報に備える人を残して、九人でトラックに乗って出発した。当時の警察の気力と体力をもってすれば、九人で八百人の中国人を抑える自信はありましたよ。途中、釈迦内の役場で、警防団が華労七、八人しばってなぐっていったからやめさせました。松峰あたりでは、道路に真っ黒になって二、三百人が座って休んでいる。どうしますか、というから、中央突破を指示して、指揮刀をトラックのライトでびらびらやりながら走った。そしたらバァッと逃げましたよ。

駐在で事情を聴き、警防団に聞いたあと、中山寮に向かいました。殺された人間やなかで、

中は大変なものでした。真っ裸で五十二人の支那人が動けずに寝てました。仮死状態なんです。ね。衣類やふとんまでとってやつらは逃げたんです。鹿島の事務所で話を聞き、善後策を練るため駐在に戻りました。

地方民

三浦さんの話が続く。

駐在に戻って、いろいろ話しているうちに、夜明けごろ、三人の中国人が訪ねてきました。中隊長と通訳と副中隊長ですか。自分たちは蜂起に反対したけれど、こうなったというんです。この連中の話で、だれが犯人で主謀者か全部わかってしまった。捜査は簡単にいったんですよ。

この仲間が松峰で逢った二百人で、私が見た真っ黒い集団というのはイモ畑を掘って食べてたんです。それが、警察に救いを求めてきた。中山寮に帰れというと、帰れば裏切り者ということ必ずひどい目にあう。警察の目が届くところに置いてくれるというんです。

それで、共楽館のどこでもいいから貸してくれと会社(同和鉱業)に頼むと、華労の中にはアミ、バ赤痢や皮膚病が多いからと断られました。仕方なく、もう一度中山寮に行けという、副中隊長が、あの広場でいいからと勝手に座り込んだ。あとで捕まった人も、そこに置いていかれたというのが真相ですよ。自然に共楽館前に集められたわけです。

広場に三日も置いたのはね、中山寮の現場検証で検事が来るのが二日になったし、盗まれた食料の補給が遅れたからです。三日目には、メリケン粉のかゆをやりました。逃げた時、メリケン粉を沢の水でとかして食べたりして、下痢が多かったですよ。それに炎天下でしょ。あれで何人が死にました。

地方民(注)が大分同情したようなこというけど、あのころは、殺気立っていて抑えるに困りましたよ。太さ五センチぐらいの丸太ん棒持ってくるんですからね。殴らせないと「警察はひでえ、無理解だ」といったもんです。

広場に置いたのはしばっていいないし、殴らなかったはずですよ。取り調べは検事局がやったけれど、共楽館は使わせなかったでしょ。あとでいろいろ聞くと、中山寮の生活はまことに同情に耐えなかったですね。

三浦さんは詳しく説明した。「実情は話すけれど、今さらトラブルを起こしたくない」ともつけ加えた。

△注▽軍隊や警察官以外の一般の人たちの意味。旧警察用語。

どんぶり

秋田県警察史によると、七月一日から六日までに、警防団七千五百人、一般民間人一万三千六百人、警察官四百九十人など延べ二万五千人が動員され、七百九十二人の中国人を逮捕、耿大隊長ら十三人を国防保安法の戦時騒じょう殺人罪として送検した。

李さんは十三人の一人として、秋田刑務所に移された。取り調べは厳しかったが、一人一部屋、三度の食事、布団でゆっくり眠れることで、「まるで天国と思った」と笑う。劉さんたち看護班は、中山寮に帰った翌日の四日から死体の処理。大きな穴に八十人、次の穴に四十人、任鳳岐だけは別にして一人で埋めた。作業は主に朝鮮人がやらされた、という。

劉さん 蜂起のあと、食事の量は少しよくなった。補導員の代わりに警官が監督につくようになったけど、殴るの前と同じね。蜂起の前と変わったことほとんどないよ。

七月中に百人が死に、八月に入っても犠牲者は続いた。八月十五日、日本敗戦。しかし、李さんや劉さんは、九月中旬までこのことを知らされなかった。

李さん 判決(注)あってしばらくあと、お昼のとき、アメリカの兵隊来たよ。わたしたち十三人、所長に呼ばれると、所長、笑いながら「戦争終わった。友だちになった。何か欲しいものあったら言ってほしい」というの。独房に帰ったら、布団白い新しいのになって、晩ご飯は大きなドンブリ、それ見たらほんとに終わったと思ったよ。

劉さん カレンダーないから分からないけど、九月中ごろかな、アメリカの飛行機が低く飛んで、落下傘で荷物落としたの。だけど、空襲警報も鳴らないし、変だな、ひょっとしたら戦争終わったのかと思った。それで大騒ぎになって仕事やめて、みんな中山寮に帰った。そのあと、三浦署長がきてみんなを広場に集めて、大東亜戦争終わったというの。だけど日本が負けたかどうか分からなかった。

△注▽秋田地裁は、二十年九月十一日、起訴された耿大隊長以下十一人に無期懲役などの有罪判決を言い渡した。

横浜裁判

アメリカ軍は九月十五日、ページ少佐以下九人がまずジープで秋田市に入り、十九日には百八十七人が進駐した。九月下旬ごろ、米軍捕虜の調査に花岡を訪れた一隊が、中山寮でおびただしい死体を発見、事件が表面化した。

十月に入って、仙台から進駐軍がきて中山寮を調査、河野正敏所長ら数人を秋田刑務所に収容した。三浦元大館署長も「華労に暴行を加えさせた」「一般市民に華労を逮捕させた」などの理由で二十二年七月占領軍に呼ばれ、巣鴨拘置所に入れられた。

三浦氏 中山寮の中国人は国際法のいう捕虜ではなく、契約を結んだ労働者ですよ。契約に基づく管理は事業所の責任です。私はむしろ、戦後いろいろ親切にしたと中国人に感謝されたくらいです。三回ほどの取り調べで起訴され、裁判だってまったく一方的でした。拘置中に、花岡か

いろいろな証人を連れてきて会わせましたが、全部知らないといいました。

伊勢智得氏 裁判は、中国人がこの人、といえれば終わり。証人調べがあったかもしれないが、よくわからない……………。

「花岡暴動」(三省堂新書)によると、起訴状は四十五項目にわたって河野所長、伊勢察長代理、福田、清水両補導員らの中国人虐待ぶりを列挙している。二十三年三月一日、第八軍司法廷は河野正敏〓終身刑、伊勢、福田、清水〓絞首刑、三浦太一郎、後藤健三巡査部長〓重労働二十年の判決を言い渡した。

判決は中国人強制連行を決めた政府当局、鹿島組幹部の責任を一切問わなかった。その意味でこそ、一方的だった。三浦氏によると、鹿島組は証人に賄賂を使い、責任を警察に押しつけようとしたという。劉さんや李さんも、鹿島組から接待を受けたことがあったと認める。鹿島守之助がGHQに呼び出されると、鹿島組や日本建設工業会は強力な支援体制で責任が上層部へ波及するのを防いだ。

ある日突然、夫が連れ去られ、長い拘禁の末死刑と決まった伊勢夫人は「寝た切りの父親と四人の子を抱えて、あの当時の難儀だけ……………こうしているのが不思議な……………」とうつぶいた。

華人特配

日本の敗戦で、事情は一変した。華人特配とするされた食糧がどんどん中山寮に届けられた。病人は病院に収容され、薬も届いた。一方で、花岡や周辺町村の住民は「中国人が六月三十日の仕返しに来る」といううわさに緊張した。長面袋地区ではニワトリが盗まれ、中国人のせいだという話になった。

劉さん ぼくたち、広場に集まってみんなで話した。自由の身になって、帰国すれば親、兄弟にも会える。でも、今もし町に出て、だれかに暴行したり、品物とったり、うらみのある人を虐待したり、復讐するなら、ぼくたちみんなの責任になる。六月三十日の事件は抵抗だけれど、今度悪いことすれば謀略になってしまう。それでは、中国人は教養ない民族といわれるし、みんなよく考えよう。

劉さんたちは五人の責任者を選んだ。一人二人で外出しないよう仲間から見張りを立て、最低一班十二人で行動、外出は事務所の証明書をもろう。不祥事があれば班だけでなく、小隊二十五

人全員の責任と決めた。「あれだけうらみあって、復讐すればそんな簡単にすむことない」から、だった。

劉さん 復讐といっても、犬にかじられたら犬をかじるか。仕事ないから、いろいろゲームしたり、私は歴史が好きだから三国志や水滸伝の話して毎日過ごした。薬の時間になると、かごを持って、みんなに薬を配った。あれで大分落ち着いた。

九月六十八人、十月五十一人と犠牲者は続いた。一年以上の虐待で、生命はボロボロにすり減っていた。悲惨な同胞の姿を見ながらも、船川事件(注)のような復讐はこらえた。地元の人たちも「心配した暴動とか仕返しは全然なかった」と口をそろえる。それどころか、タバコやおにぎりをもらった親切な住民を訪ね、お礼をした中国人もあった。敗戦で、日本人は食糧不足のどん底に突き落とされていた。

十一月二十九日、約五百四十人の中国人が祖国に帰った。劉さんや仲間約二十四人が軍事裁判の証人などで日本に残った。

△注▽二十年十月三日、男鹿市では港湾労役で働かされていた中国人約九十人が船川警察署、秋田華工管理所など七カ所を襲った。

キセル

昭和二十五年春、雪は解けたが若草はまだ出ないころ、当時花岡にいた稲庭中教諭佐藤和喜治さん(五〇)は中山寮跡へ行ってみた。朝鮮人金一秀さんと一緒だった。中山寮は解体され、土台だけになっていた。赤土の地面のあちこちに白いものが散らばっている。人間の骨だった。拾い集めると、小さな山ができた。「中国の人が使ってたんでしょうか。骨にまじってキセルが一本出てきて、なんともいえない気持ちでした」と佐藤さんはいう。

それ以前、中国人遺骨はどうなっていたのか。佐藤さんのガリ版刷の覚書から。

▽蜂起までの遺体は、中山寮裏の鉢巻山に埋葬、蜂起以後は大きな穴を掘り「大根を積み重ねるように」埋めた。

▽二十年十月、鹿島組があわてて始めた遺体処理作業を米軍が中止させ、米軍の立ち会いで鉢巻山、大穴の遺体を火葬にした。鹿島組は、それを大小約四百の箱に入れて、近くの信正寺に預けた。故郷谷達道住職は「納骨堂を作ってほしい」と組に要求したが断られ、やむを得ず本堂に納めた。

▽二十四年十一月、鹿島組が信正寺裏に「華人死没者追善供養塔」という小さな納骨堂を建てた。四年間、葛谷任職か一人で守ってきた遺骨を移した。

元大館署長・三浦太一郎氏は、「二十年の十月ごろ、名前を確認した三百二十七、八人分の遺骨を組で作った立派な箱に入れ、貨車を一つ借り切って中国に送ったはずです。名前のわからない七十近くを信正寺に持っていったんですよ」と証言する。

二十八年になって、鹿島組の納骨堂が開かれた時、佐藤さんは間違いなく四百近い骨箱を確認したという。だが、三浦氏の証言との食い違いをただす証言は得られなかった。遺骨といっても一分分がきちんと納められたわけではなく、死者の数に合わせて木箱に分け入れたようで、そこから食い違いが起きたのかもしれない。

鹿島組、米軍などの遺骨処理がきわめて粗末だったことが、佐藤さんらの報告で明らかになった。これがきっかけで、華僑総会、日本共産党、民主団体などの遺骨発掘、送還運動が始まり、「花岡事件」が人々の記憶によみがえった。